

令和3年8月22日

南の風東京2020オリンピック特集号Ⅶ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

さあいよいよやってきました。決勝です。相手は絶対王者のアメリカです。

今回もハイライトを戦評風に書き、私の感想も絡めます。

立ち上がりアメリカは、グライナーにボールを入れキックアウトしてスチュワートが3Pを打つが外れる。日本はリバウンドから素早くボールを運び、町田がドライブでペイントを攻め、ターンしてパスを試みるが、合わせがなくターンオーバーになる。直後バードのペリメーターのジャンプショットが決まる。日本は高田がポストでシュートするが決まらない。リバウンドからアメリカが走り、バードのパスがウイルソンに通りシュートが決まる。

日本は町田がボールを回して、宮澤が3Pを狙うが落ちる。アメリカがしっかり対応している。その後日本は、赤穂がドライブインを見せるが、グライナーにブロックされる。エンドラインのスローインフォーメーションから、高田が落ちていてシュートを決める。日本の初得点となる。

アメリカは、グライナーのポストでのショット、トーラジのジャンプショットで点差を広げる。その後シュートブロックやパスチェックで、思うように攻められない日本に対して、アメリカはリバウンドから速い展開で攻め得点を重ねる。

日本は、宮澤の3Pシュートへのウイルソンのファウルでフリースロー。宮澤が3本とも沈める。その後、3Pシュートやペイントでのシュートが決まらない中、アメリカ、グライナーがジャンプショットを決めたところで、日本がタイムアウト。(日本5-14アメリカ)

タイムアウト明け何とか得点したい日本だが、宮澤、高田の3Pシュートが落ちる。アメリカは、ウイルソン、グライナーが高さを生かしたペイントシュートを決める。日本は得点後のトランジションを生かし、高田がトップ付近の3Pシュートを決める。(日本8-18アメリカ)

グライナーが高田に対するオフェンスファウルを取られたときに、両チーム選手交代。日本は高田を残し、長岡、本橋、東藤、エブリンに交代。アメリカもバード、グライナー、スチュワートを残し、ロイドとチャールズに交代。

日本は本橋が、マークが甘くなった瞬間3Pシュートを決める。

その後両チームシュートが思うように決まらない。日本はエブリンのペイントアタック、長岡のポストでのステップインなど、上手く攻めるがフィニッシュが決まらない。アメリカのブロックや高さが気になる。アメリカは、またしても、ローポストでポジションを取ったグライナーがゴール下でシュートを決める。日本はすぐさまボールをフロントに入れ、マークがルーズになった本橋が2本目の3Pシュートを沈める。

終了間際、日本のローテからのリカバリーが遅くなったところを、ロイドが3Pシュートを決める。

第1Q終了(日本14-23アメリカ)

第1Qのアメリカの戦い方は、このゲームに対するアメリカの決意を感じました。

まずディフェンスです。日本の3Pシュートの精度を消すために、町田選手にはややルーズにマッチアップし、レシーバーとなるシューターにはディスタンスを詰めて(ワンアーム以内)3Pを打たさない

という戦術です。

町田選手のマークをルーズしたのは、彼女の3Pの精度は高くないと分析した結果だと思えます。

また、町田選手からのパスを徹底して読み、町田選手からの合わせパスを封じました。これによって日本の攻めは、かなり制限されることになりました。そしてタイトにマッチアップするアメリカのディフェンスに対して、日本はどうしても高さ（特に手の長さ）が気になり、シュートの確率が落ちました。

一方アメリカのオフェンスは、リバウンドからのトランジションを素早くし、高さのない日本の弱点であるインサイドを徹底して狙う戦術にできます。加えて、日本がインサイドをヘルプして複数で守れば、キックアウトして外からのショットで攻めます。この一連の流れが功を奏しました。

第2Q。日本は東藤のフェーダウェーシュート、長岡のポストでの力強いターンシュート、本橋の3本目の3Pシュートが決まる。アメリカはスチュワートのストップジャンプショット、チャールズのドライブショット、グライナーのスクリーナーからポストをつくってのシュートが決まる。

その後アメリカは高さを生かして、ポストの裏へのループパスが再三決まり確実に得点する。日本は町田のドライブから、高田への合わせが続けて決まり得点する。終了寸前に、赤穂の3Pシュートが決まる。2Qが終わり、日本39-50アメリカ。

日本の攻めは、中を突いて外へキックアウトしたり、ドライブから中へ合わせたりするプレーが決まるが、中々連続して得点することができず点差が詰まりません。

アメリカは、リバウンドからのプルアップジャンプショットや、インサイドへのループパスが効果的に決まり、確実に得点し点差をキープします。

後半が始まる。立ち上がりから日本は、インテンシティーの高いディフェンスで圧力を掛ける。積極的にコフィンコーナーでダブルチームに行く。宮澤のポストでのパスカットから全員が走る。高田から赤穂へパスを出すが無通らない。直後、町田がスクリーンを利用してドライブでシュートを決める。

アメリカはグライナーのゴール下、ウイルソンのジャンプショットが確実に決まる。何とか打開したい日本は、町田がスタガードスクリーン（オコエと高田）を利用しマークを外し、ダイブした高田に合わせ得点する。日本45-58アメリカ

その後、アメリカはグライナー、ウイルソンのインサイドプレーで得点する。流れを引き寄せたい日本は町田がドライブからリアクトする味方に合わせたり、高田、オコエにキックアウトしたりするが、フィニッシュが決まらない。そんな中、町田がドライブからペースを変え、ドリブルシュートを決める。連続得点して差を詰めた日本だが、バードがタイミングよく3Pシュートを沈める。さらに直後ウイルソンのリバウンドからのゴール下ショットが決まり点差が離れる。日本47-68アメリカ。

アメリカ、グライナーのインサイドシュートが落ちると、町田が速い展開でボールを運び、オコエが3Pシュートを打つがブロックされる。瞬時に走られてバードが速攻で得点する。日本タイムアウト。

タイムアウト明け、アメリカスチュワートの3Pシュートが決まる。日本も直後エブリンが走って合わせ3Pシュートを入れる。さらに本橋がドライブからフェーダウェー気味のシュートを沈める。

日本は激しくプレスし、ターンオーバーを誘い高田がドライブからシュートに行く。アメリカ、グレイがファウル。高田が2本決める。さらにディフェンスのインテンシティーを上げるが、グライナーにローポストで決められ3Qが終了。日本56-75アメリカ。

日本は必死のディフェンスから食らいつくが、アメリカは冷静にインサイドを使って得点します。打開の糸口を見つけるには、もう一段ギアを上げたディフェンスから活路を見いだしたい日本です。

いよいよ勝負が懸る4Qに入ります。

日本は、高田、本橋、長岡、東藤、エブリンでスタート。強度を上げたディフェンスで対応する。アメリカ、グライナーのインサイドシュートが決まる。そして東藤の3Pシュートをブロックしたウイルソンがそのまま走り、パスを受けゴール下シュートを決める。

その後両チーム、シュートの精度を欠くが、日本は本橋が3Pシュートを入れる。アメリカはスチュワートのリバウンドシュートが決まる。パスカンでフリースローも決める。日本59-82アメリカ。

日本は交代した三好がタイミングよく3Pシュートを入れる。続けて三好はペイントのジャンプショットも決める。町田も果敢にドライブシュートに行き得点する。やや集中力を欠いたアメリカの隙を突いて、エブリンのゴール下バックショットが決まる。

日本はディフェンスのインテンシティーを緩めることなく、相手に向かって行く。町田のドライブがファウルとなりフリースローを決める。交代した宮崎のドリブルシュートがパスカンとなる。フリースローも決まる。さらにディフェンスから宮崎が走り、フォローしたオコエがファウルをもらう。フリースロー2本とも沈める。

最後の攻めは、オコエの3Pシュート。惜しくも外れるがエブリンがタップ気味に決める。

そしてタイムアップ。日本75-90アメリカ。

最後まであきらめず強度の高いディフェンスからブレイクし、攻め続けた日本は、残念ながら敗れたが史上初めての堂々たる銀メダルに輝いた。絶対女王アメリカは、オリンピック通算7連覇を飾った。

結果は残念でしたが、王者アメリカに堂々と挑み、日本のバスケを最後までやり抜いた12人の選手の皆さん、お疲れ様でした！！そして銀メダルおめでとうございます！！

決勝戦を振り返ります。決勝のスタッツです。

	2 P	3 P	F G	F T	OR	DR	TR	AP	TO
日本	43% 20/46	26% 8/31	36% 28/77	92% 11/12	12	26	38	16	10
アメリカ	59% 33/56	31% 4/13	54% 37/69	80% 12/15	8	36	44	28	12

日本の武器である3Pシュートについてです。決勝までの5試合の平均確率は43.6%でしたが、決勝では、上の表のように26%に抑え込まれました。本橋の4本が最高で、宮澤、林は1本も決めることができませんでした。これは感想にも書きましたが、アメリカが徹底して町田のパスを封じたことと、林と宮澤にはレシーブさせない戦術が機能した結果だと思えます。

また町田のドライブからの合わせの、リアクトについても封じました。しかもシュートブロックの数は12本に及びました。

そしてアメリカは攻めに転じると、高さのない日本の弱点であるインサイドを徹底的に狙いました。アメリカのグライナー(205cm)はフィールドゴール14/18で、30得点を上げました。ウイルソン19点、スチュワート14点とフォワード陣も得点を重ねました。

終始リードを奪う余裕の展開にも見えたのですが、ここで対戦したアメリカの選手のコメントを紹介します。

15番ブリトニー・グライナーは「日本は、アークの後ろからならどこでもシュートが打てるチームだから、決して動きを止めることができず、守るのはたいへんでした」、「数ポゼッションで修正してくるから、守れている時間も安心できなくて、勝っていても丁寧に自分たちのペースを保つ必要がありました」と、ディフェンスで手を焼いたことを明かした。

10番ブレアナ・スチュワートは「5人全員でプレーメイクする日本のスタイルは、女子バスケの新しいトレンドになるかもしれない。今のバスケでは、シュートが苦手ではコートに立てないけど、日本は全員がシューターみたいにプレーする。」と語る。

また12番ダイアナ・トーラジは、「このチームを応援せずにはられません。見たいと思わせるスタイルを遂行して、一生懸命プレーしています。どんなときにも動じることなく、一丸となってプレーするのを見るのは本当に楽しいものです」と、日本代表の戦いぶりを称賛している。

そして6番スー・バード。アメリカ代表の『伝説のキャプテン』（アメリカのオリンピック7連覇の中で、5連覇に関わっている）は、この大会を最後に代表を離れることを宣言しており、代表引退が大きな話題となったが、「私が引退するのは、タクがもどってきて、ルイ（町田）と組んだら厄介だから、とよく冗談を言っています」とジョークを交えて、日本代表について語った。

タクとは、WNBAのシアトルストームと一緒にプレーした渡嘉敷 来夢のことだ。

バードはこう続ける。「最初は良いポイントガードがいる、という印象だったのですが、その他にもたくさん良い選手がいました。タクがいればサイズやシュートで、今の土台の上に全く別の層をつくってくれるでしょう。冗談ではなく、日本は40分間気の抜けない相手でした。ただ彼女たちには拍手を送りたい。対戦するのはたいへんだけど、見ていてとても楽しいチームです」

さらにスチュワートは、今大会が無観客だったことに触れ、「無観客じゃなかったら、私たちは2回も日本と試合をしているから、たいへんなことになっていたでしょうね」と語る。トーラジも「今日のアリーナに3万人の観客がいなかったのは、私たちにとってラッキーでした。ただ観客がいても素晴らしい経験になっていたと思います」とコメントしている。

そして日本の高田キャプテンは、こんなコメントを残しました。

「代表に選ばれて、自分がどうなりたいのかをしっかり持つことが大切。頭を使うこと、スクリーンの角度など、細かいところまでリピートしないと海外のチーム相手では勝てない。試合より練習の方がしんどかった」と語っていました。

トム・ホーバスヘッドコーチは、「5年前、一人ひとりが自分の力を信じてないから、チャレンジさせたかった」語り、最後に日本代表について、「スーパースターはいないが、スーパーなチーム」と表現していました。

アメリカは決勝に臨むに当たって、日本のプレースタイルを徹底的に分析したそうです。アメリカ代表の完璧なディフェンスを崩すのは簡単ではありませんが、観客がいて『ホームコートの雰囲気』の後押しを得られれば、何かが変わっていたかもしれません。残念ながら、今回は果たせませんでした。

日本女子代表は決勝では敗れたものの、日本バスケットボール界の歴史を変えました。オリンピックで、世界第2位、銀メダルという快挙です！！日本中に勇気と感動を与えてくれました。

ミニバスからBリーグ、Wリーグまで盛り上がることは間違いありません。

日本代表の選手の皆さん、スタッフ及び関係者の方々、そして会場で応援していただいたボランティアの皆様、本当にありがとうございました！！

日本は今後、改めて世代交代するアメリカ代表に挑むことになります。また世界の強豪国から追われる立場にもなります。より一層の努力を積み上げ、パリに向かって挑戦してください！！

私たちは、東京オリンピックの日本代表の緻密で正確なプレー、精度の高いシュート、体を張ったディフェンスをいつまでも忘れません！！